

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第939号 平成27年6月1日

演出過剰（1）

NHKは、報道番組「クローズアップ現代」で「やらせ」があったのではないかとされる問題で、4月28日、調査委員会による調査報告書を発表しました。

まず問題となった放送は、2014年（平成26年）5月14日に放送された「追跡『出家詐欺』～狙われる宗教法人～」で、その内容は、多重債務者を出家させ、戸籍上の名前を変える事で多重債務者であることを分からないようにして、金融機関から不正に金を借りさせるという「出家詐欺」の実態と背景に迫るというものです。

この放送後、番組内で出家を斡旋するブローカーとして紹介された男性A氏はNHKに対して、「記者の指示によるやらせがあり、ブローカーとして放送された」として放送での訂正を求めています。

こうした事態を受け、NHKではNHK副会長の堂元 光氏を委員長とする調査委員会を設置して調査を行って来たもので、調査結果は、いわゆる「やらせ」はなかったものの「過剰な演出」があったとし、取材を担当した大阪放送局の男性記者の停職3か月を筆頭に、大阪報道局専任部長の減給等計15人を処分する事とし、梶井勝人会長等役員4人も報酬の一部を自主返納するという事態となっています。

以下、調査委員会の報告書を基にしながら、今回の「過剰演出」と「やらせ」の問題について考えてみたいと思います。

報告書では、取材・製作上において

- (1) 事実関係の誤りと不十分な取材
- (2) 「やらせ」はあったか
- (3) 不適切な取材・撮影方法
- (4) 実際の取材過程とかけ離れた編集
- (5) 情報共有の欠落
- (6) 安易な「匿名化した映像」の使用
- (7) 問題を見過ごした試写

という7項目について問題点を指摘しています。

これらの内容を詳細に紹介する事は紙面の都合もあり避けますが、重要な点に絞って整理しておきたいと思います。

まず、「事実関係の誤りと不十分な取材」に関して報告書では、「記者は一連の取材を多重債務者であるB氏の話に依拠して進め、A氏に対する直接取材はロケの当日以外は行っていない」とし、「こうした不十分な取材の結果、記者は裏付けのないままA氏をブローカーであると番組で断定的に伝えた」としています。

次に、「やらせはあったか」に関し報告書では、「A氏を裏付けのないままブローカーと断定的に伝えた事は適切ではなかったが、B氏は多重債務者で、本当に出家を考えていた」ので、「記者が意図的または故意に、架空の相談の場面を作り上げ、A氏とB氏に演技をさせたとはいえず、「事実のねつ造につながるいわゆる『やらせ』は行っていない」と断定しています。

次に、「不適切な取材・撮影方法」に関して報告書では、撮影が行われた部屋に記者がいて、A氏とB氏の相談のやり取りに声をかけているというのは、記者が自らに都合の良いシーンに仕立てようとしたとの疑念を持たれかねず不適切だったと指摘しています。

また、相談している様子に向かいのビルから隠し撮り風に撮影した事や、記者が相談後にB氏を追いかけて問いただすシーンは、視聴者に対し「記者はブローカーから了解を得た上で、多重債務者が相談に現れるのを待って撮影した」と、実際の取材過程とは異なる流れを印象付けるものであった、と述べています。

こうした一連の対応について報告書は、「今回の撮影では、事実を伝える事よりも、決定的なシーンを撮ったように印象付ける事が優先され、「番組の狙いを強調するあまり事実を歪曲してはならない」とするガイドラインの基本姿勢を逸脱した過剰な演出だったと批判しています。

更に「実際の取材過程とかけ離れた編集」に関して報告書は、映像の構成では「まずブローカーの存在を突き止めてインタビューを行い、更にブローカーを訪れた多重債務者との相談を取材し、相談後に多重債務者を追いかけて問い質す」というものであったが、実際は、A氏とB氏が一緒に現われたのに、記者に2人の関係を確認せず編集を進めた」と指摘した上で、「視聴者にどのような印象を与えるのかという点を考えず、実際の取材過程と異なる編集が行われた事は適切を欠く」と批判しています。

以上述べた事情を踏まえた上で、報告書では「やらせ」はなかったと断定しています。しかし、問題となった放送を担当した記者や編集者が、「事実を正確に分かり易く伝えよう」という視点ではなく、取材の成果をより強調するために、事実と異なる形でA氏とB氏の相談のやり取りを意図的に「スクープ映像仕立て」にしたとすれば、演出過剰というレベルを遙かに超えているというべきではないでしょうか。

記者といえども人間ですから、誤報という問題を避けて通る事は出来ません。だ

からこそ、これを避けるためには、裏付け取材を徹底しなければならないはずで

もう一つ重要な事は、自分の描いたシナリオに事実関係を合わせるのではなく、事実関係の中から真実を描き出す事だと思います。

私も現役時代、取材されて懇切に説明したにもかかわらず、実際の記事では私が伝えようとした真意が伝わっていないというケースは、珍しい事ではありませんでした。その原因は、取材した記者が、都合のよい部分だけを切り取って記事にするという安直な姿勢に在るといわざるを得ません。記事で書かれている事は私が確かに話した事ですから誤報でも「やらせ」でもありませんが、記者の皆さんは、同じ発言でも料理の仕方では違ったものとして伝わってしまうという事への配慮、恐れというものを持っていて欲しいと思っています。

(続く)